

# 小説本文用フォント見本

Ver.20240115

ALBA LUNA の小説本制作「らくらく」「コダワリ」で利用可能な小説本文用フォントの見本です。

小説本文用フォントは全10種より選択可能です。おまかせの場合は文体・内容にあわせ、有償フォントから優先して選択します。また、濁点つき仮名を使用する場合、さら明朝以外のフリーフォントからご選択いただけます。

フォントの中には、そのまま利用するとダッシュが繋がらないものや、他のフォントと見た目が異なる等の理由で組版上うまく取まらないものがありますので、該当する記号は他のフォントに置換しております。

しつぽり明朝など、一部フォントはPDF上でかなり細く見えますが、これはフォント側のディスプレイ表示時の設定によるものです。印刷時に細く印刷されるかどうかは各印刷所での補正により異なります。

このPDFは印刷可能です。コンビニ印刷も可能です。A4サイズで全3枚です。

サンプル文章：アカツキユウ「会いたくなったら」  
[https://twitter.com/akatsuki\\_yu/status/1616594931770085376?s=20](https://twitter.com/akatsuki_yu/status/1616594931770085376?s=20)

※この説明文のフォントはヒラギノ W2 です

## ALBA LUNA

イワタ中明朝体オールド

「わあ可愛い」  
組んでいた腕をいとも簡単に解き、帝の恋人は通りかかった雑貨屋の棚に釘付けになっていた。  
慣れとは恐ろしいものだ。帝は思う。一緒に歩く時、帝はほんの少し腕を空ける。その空いたスペースに、恋人はするりと腕を滑り込ませる。そうするようになったのはいつだったか。初めこそドキドキしていたし周りの目が気になったが、月日が経つにつれてそれが自然になるとともに、ドキドキすることも、周りの目が気になることもなくなった。  
自然になったのは組む瞬間だけでなく、解く瞬間もだ。何だか名残惜しそうに離す体温に、自分も名残惜しいと思ったものだが——今はその感覚はない。  
けれど変わらないものもある。今日の前で棚のカップを上げしげと見つめる恋人の顔はやはり可愛い。欲目が入っているのかそうでないかをもはや判別出来なくなっている程度には、ふたりが過ぎて来た時間は長い。あと、彼女が見る雑貨のデザインが、たいてい絶妙にあの縦に長く無表情な妖精を連想させるものである点も変わっていない。そろそろ変わってくれても良いと思うが、残念ながらあの妖精との絆を思えば、変わることはそう無いだろう。  
「ああこれすっごく可愛いけど……うーん」

筑紫 A オールド明朝

「わあ可愛い」  
組んでいた腕をいとも簡単に解き、帝の恋人は通りかかった雑貨屋の棚に釘付けになっていた。  
慣れとは恐ろしいものだ。帝は思う。一緒に歩く時、帝はほんの少し腕を空ける。その空いたスペースに、恋人はするりと腕を滑り込ませる。そうするようになったのはいつだったか。初めこそドキドキしていたし周りの目が気になったが、月日が経つにつれてそれが自然になるとともに、ドキドキすることも、周りの目が気になることもなくなった。  
自然になったのは組む瞬間だけでなく、解く瞬間もだ。何だか名残惜しそうに離す体温に、自分も名残惜しいと思ったものだが——今はその感覚はない。  
けれど変わらないものもある。今日の前で棚のカップを上げしげと見つめる恋人の顔はやはり可愛い。欲目が入っているのかそうでないかをもはや判別出来なくなっている程度には、ふたりが過ぎて来た時間は長い。あと、彼女が見る雑貨のデザインが、たいてい絶妙にあの縦に長く無表情な妖精を連想させるものである点も変わっていない。そろそろ変わってくれても良いと思うが、残念ながらあの妖精との絆を思えば、変わることはそう無いだろう。  
「ああこれすっごく可愛いけど……うーん」

「わあ可愛い」

組んでいた腕をいとも簡単に解き、帝の恋人は通りかかった雑貨屋の棚に釘付けになっていた。

慣れとは恐ろしいものだ。帝は思う。一緒に歩く時、帝はほんの少し腕を空ける。その空いたスペースに、恋人はするりと腕を滑り込ませる。そうするようになったのはいつだったか。初めこそドキドキしていたし周りの目が気になったが、月日が経つにつれてそれが自然になるとともに、ドキドキすることも、周りの目が気になることもなくなった。

自然になったのは組む瞬間だけでなく、解く瞬間もだ。何だか名残惜しそうに離す体温に、自分も名残惜しいと思ったのだが——今はその感覚はない。

けれど変わらないものもある。今日の前で棚のカップを上げしげと見つめる恋人の顔はやはり可愛い。欲目が入っているのかそうでないかをもはや判別出来なくなっている程度には、ふたりが過ぎて来た時間は長い。あと、彼女が見る雑貨のデザインが、たいてい絶妙にあの縦に長く無表情な妖精を連想させるものである点も変わっていない。そろそろ変わってくれても良いと思うが、残念ながらあの妖精たまごとの絆を思えば、変わることはそう無いだろう。

「ああこれすつごく可愛いけど……うーん」

「わあ可愛い」

組んでいた腕をいとも簡単に解き、帝の恋人は通りかかった雑貨屋の棚に釘付けになっていた。

慣れとは恐ろしいものだ。帝は思う。一緒に歩く時、帝はほんの少し腕を空ける。その空いたスペースに、恋人はするりと腕を滑り込ませる。そうするようになったのはいつだったか。初めこそドキドキしていたし周りの目が気になったが、月日が経つにつれてそれが自然になるとともに、ドキドキすることも、周りの目が気になることもなくなった。

自然になったのは組む瞬間だけでなく、解く瞬間もだ。何だか名残惜しそうに離す体温に、自分も名残惜しいと思ったのだが——今はその感覚はない。

けれど変わらないものもある。今日の前で棚のカップを上げしげと見つめる恋人の顔はやはり可愛い。欲目が入っているのかそうでないかをもはや判別出来なくなっている程度には、ふたりが過ぎて来た時間は長い。あと、彼女が見る雑貨のデザインが、たいてい絶妙にあの縦に長く無表情な妖精を連想させるものである点も変わっていない。そろそろ変わってくれても良いと思うが、残念ながらあの妖精たまごとの絆を思えば、変わることはそう無いだろう。

「ああこれすつごく可愛いけど……うーん」

「わあ可愛い」

組んでいた腕をいとも簡単に解き、帝の恋人は通りかかった雑貨屋の棚に釘付けになっていた。

慣れとは恐ろしいものだ。帝は思う。一緒に歩く時、帝はほんの少し腕を空ける。その空いたスペースに、恋人はするりと腕を滑り込ませる。そうするようになったのはいつだったか。初めこそドキドキしていたし周りの目が気になったが、月日が経つにつれてそれが自然になるとともに、ドキドキすることも、周りの目が気になることもなくなった。

自然になったのは組む瞬間だけでなく、解く瞬間もだ。何だか名残惜しそうに離す体温に、自分も名残惜しいと思ったのだが——今はその感覚はない。

けれど変わらないものもある。今日の前で棚のカップを上げしげと見つめる恋人の顔はやはり可愛い。欲目が入っているのかそうでないかをもはや判別出来なくなっている程度には、ふたりが過ぎて来た時間は長い。あと、彼女が見る雑貨のデザインが、たいてい絶妙にあの縦に長く無表情な妖精を連想させるものである点も変わっていない。そろそろ変わってくれても良いと思うが、残念ながらあの妖精たまごとの絆を思えば、変わることはそう無いだろう。

「ああこれすつごく可愛いけど……うーん」

「わあ可愛い」

組んでいた腕をいとも簡単に解き、帝の恋人は通りかかった雑貨屋の棚に釘付けになっていた。

慣れとは恐ろしいものだ。帝は思う。一緒に歩く時、帝はほんの少し腕を空ける。その空いたスペースに、恋人はするりと腕を滑り込ませる。そうするようになったのはいつだったか。初めこそドキドキしていたし周りの目が気になったが、月日が経つにつれてそれが自然になるとともに、ドキドキすることも、周りの目が気になることもなくなった。

自然になったのは組む瞬間だけでなく、解く瞬間もだ。何だか名残惜しそうに離す体温に、自分も名残惜しいと思ったのだが——今はその感覚はない。

けれど変わらないものもある。今日の前で棚のカップを上げしげと見つめる恋人の顔はやはり可愛い。欲目が入っているのかそうでないかをもはや判別出来なくなっている程度には、ふたりが過ぎて来た時間は長い。あと、彼女が見る雑貨のデザインが、たいてい絶妙にあの縦に長く無表情な妖精を連想させるものである点も変わっていない。そろそろ変わってくれても良いと思うが、残念ながらあの妖精たまごとの絆を思えば、変わることはそう無いだろう。

「ああこれすつごく可愛いけど……うーん」

「わあ可愛い」

組んでいた腕をいとも簡単に解き、帝の恋人は通りかかった雑貨屋の棚に釘付けになっていた。

慣れとは恐ろしいものだ。帝は思う。一緒に歩く時、帝はほんの少し腕を空ける。その空いたスペースに、恋人はするりと腕を滑り込ませる。そうするようになったのはいつだったか。初めこそドキドキしていたし周りの目が気になったが、月日が経つにつれてそれが自然になるとともに、ドキドキすることも、周りの目が気になることもなくなった。

自然になったのは組む瞬間だけでなく、解く瞬間もだ。何だか名残惜しそうに離す体温に、自分も名残惜しいと思ったのだが——今はその感覚はない。

けれど変わらないものもある。今日の前で棚のカップを上げしげと見つめる恋人の顔はやはり可愛い。欲目が入っているのかそうでないかをもはや判別出来なくなっている程度には、ふたりが過ぎて来た時間は長い。あと、彼女が見る雑貨のデザインが、たいてい絶妙にあの縦に長く無表情な妖精を連想させるものである点も変わっていない。そろそろ変わってくれても良いと思うが、残念ながらあの妖精たまごとの絆を思えば、変わることはそう無いだろう。

「ああこれすつごく可愛いけど……うーん」

「わあ可愛い」

組んでいた腕をいとも簡単に解き、帝の恋人は通りかかった雑貨屋の棚に釘付けになっていた。

慣れとは恐ろしいものだ。帝は思う。一緒に歩く時、帝はほんの少し腕を空ける。その空いたスペースに、恋人はするりと腕を滑り込ませる。そうするようになったのはいつだったか。初めこそドキドキしていたし周りの目が気になったが、月日が経つにつれてそれが自然になるとともに、ドキドキすることも、周りの目が気になることもなくなった。

自然になったのは組む瞬間だけでなく、解く瞬間もだ。何だか名残惜しそうに離す体温に、自分も名残惜しいと思ったのだが——今はその感覚はない。

けれど変わらないものもある。今日の前で棚のカップを上げしげと見つめる恋人の顔はやはり可愛い。欲目が入っているのかそうでないかをもはや判別出来なくなっている程度には、ふたりが過ぎて来た時間は長い。あと、彼女が見る雑貨のデザインが、たいてい絶妙にあの縦に長く無表情な妖精を連想させるものである点も変わっていない。そろそろ変わってくれても良いと思うが、残念ながらあの妖精たまごとの絆を思えば、変わることはそう無いだろう。

「ああこれすつごく可愛いけど……うーん」

# 小説本文 組版見本の 本

Novel Layout Sample Book

ALBA LUNAの小説本制作で選べるフォントや、「らくらく」プランで選択可能な小説本文レイアウトの見本の本を制作いたしました！

紙と印刷所が異なる複数バリエーションをご用意しております。ご利用予定の印刷所のものを選ぶもよし、気になっている紙のものを選ぶもよし、複数購入して見比べるもよし。

ALBA LUNAの小説本制作をご利用になる方の資料としてはもちろん、小説同人誌を制作する皆さまの参考になる本となっております。

同人イベントでの販売の他、通販（BOOTH・メロンブックス）のお取り扱いもございます。

詳細はWebサイト＞Books＞小説本文組版見本の本より、特設ページをご覧ください。

<https://albalunaweb.net/books/novel-layout-sample-book>



夜永オールド明朝

「わあ可愛い」

組んでいた腕をいとも簡単に解き、帝の恋人は通りかかった雑貨屋の棚に釘付けになっていた。

慣れとは恐ろしいものだ。帝は思う。一緒に歩く時、帝はほんの少し腕を空ける。その空いたスペースに、恋人はするりと腕を滑り込ませる。そうするようになったのはいつだったか。初めこそドキドキしていたし周りの目が気になったが、月日が経つにつれてそれが自然になるとともに、ドキドキすることも、周りの目が気になることもなくなった。

自然になったのは組む瞬間だけでなく、解く瞬間もだ。何だか名残惜しそうに離す体温に、自分も名残惜しいと思ったのだが——今はその感覚はない。

けれど変わらないものもある。今日の前で棚のカップを上げしげと見つめる恋人の顔はやはり可愛い。欲目が入っているのかそうでないかをもはや判別出来なくなっている程度には、ふたりが過ぎて来た時間は長い。あと、彼女が見る雑貨のデザインが、たいてい絶妙にあの縦に長く無表情な妖精を連想させるものである点も変わっていない。そろそろ変わってくれても良いと思うが、残念ながらあの妖精たまごとの絆を思えば、変わることはそう無いだろう。

「ああこれすつごく可愛いけど……うーん」

# 小説本文見出し見本

Ver.20240115

ALBA LUNAの小説本制作で利用可能な見出しデザインの見本です。作品タイトル・章タイトルとして使用します。

フォント種は小説本文に設定しているフォントと同一になります。それぞれ、使用する行数、アキ行数が異なります。ページまたぎを厳密に調整したい方は、サンプル横に記載している使用行数を参考に、もしくは配布するテンプレートを利用して調整してください。

- 見出し見本のフォントは全てリュウミンで統一しています。
- 見本では紙面の都合上、同じページに見出しが2つ入っていますが、組版処理では見出しの前で改ページされます。
- 見出し右側にある薄い線は見出し1行目の右端(テキストグリッドの右側)の目安線です。紛らわしいですが、見出しのデザインではありません。

サンプル文章：アカツキユウ「It's not too DARK」  
<https://albaluna-book.booth.pm/items/4148063>

※この説明文のフォントはリュウミンです

## ALBA LUNA

### 夏祭り・午後8時37分

「つつきゅん！ あーいたいたー！」  
花火が終わり、人混みが散り始める中、結希は微動だにせずその場に立ち尽くしていた。手揚げの中でスマホが揺れていた気がしたが、見なかった。結希の心中はそれどころではなかった。スマホが何度か揺れた数分後、狭霧が結希を見つけて近づいて来た。何故だか、結希は迷子になった子どものように、狭霧の姿にホッとした。

### 夏祭り・午後8時37分

「つつきゅん！ あーいたいたー！」  
花火が終わり、人混みが散り始める中、結希は微動だにせずその場に立ち尽くしていた。手揚げの中でスマホが揺れていた気がしたが、見なかった。結希の心中はそれどころでは

### 夏祭り・午後8時37分

「つつきゅん！ あーいたいたー！」  
花火が終わり、人混みが散り始める中、結希は微動だにせずその場に立ち尽くしていた。手揚げの中でスマホが揺れていた気がしたが、見なかった。結希の心中はそれどころではなかった。スマホが何度か揺れた数分後、狭霧が結希を見つけて近づいて来た。何故だか、結希は迷子になった子どものように、狭霧の姿にホッとした。

「つつきゅん！ あーいたいたー！」  
合流するから待ってて！」  
結希を見つけた狭霧は、素早く誰かに連絡を取っている。おそらく相手は如歌だ。一言二言手短かに話をして通話を切り、スマホを仕舞う一連の動きを、結希は何となく眺めていた。  
「マンガスは？ 一緒にやなかったの？ あつちも探さなきゃ——」  
「穂邑、くんは……」

### 夏祭り・午後8時37分

「つつきゅん！ あーいたいたー！」  
花火が終わり、人混みが散り始める中、結希は微動だにせずその場に立ち尽くしていた。手揚げの中でスマホが揺れていた気がしたが、見なかった。結希の心中はそれどころではなかった。スマホが何度か揺れた数分後、狭霧が結希を見つけて近づいて来た。何故だか、結希は迷子になった子どものように、狭霧の姿にホッとした。

### 夏祭り・午後8時37分

「つつきゅん！ あーいたいたー！」  
花火が終わり、人混みが散り始める中、結希は微動だにせずその場に立ち尽くしていた。手揚げの中でスマホが揺れていた気がしたが、見なかった。結希の心中はそれどころでは